# Peace Seeds
ヒロシマの10代がまく種

被爆者の記憶を受け継ぐ、というのは大変なことです。被爆者の多くは「実際に遭っとらんあんたらには分からんじゃろう」と言います。確かにそうかもしれません。しかし、分からないから、と諦めてもいいのでしょうか。

今回、漫画という親しみやすい方法で、被爆者の思いを受け継ごうとしている人たちに取材しました。ジュニアライターの親世代に当たる40～50代の作者たちは、戦争・被爆体験はもちろん、戦後の苦しい時代も経験していません。それでも、被爆者に話を聞き、資料を調べて作品を仕上げています。

漫画の中で主人公たちは、恋をし、家族を思いやり、時にはケンカをしながら戦中戦後を生きています。現代が舞台になっている作品もあるなど、感情移入しやすい工夫がちりばめられています。皆さんも一度手に取って読んでみませんか。

△ピース・シーズ△
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学1年から高校3年までの39人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

## 第33号　21世紀の原爆漫画

# 生活者目線で 身近な作風

## 残酷な悲劇と向き合う
### こうの史代さん（47）

「原爆や戦争をより身近に、主人公を友達のように感じてほしい」（撮影・中２斉藤幸歩）

原爆をテーマにした新作が少なく、「ヒロシマについて描いてみない」と編集者の提案を受けた広島市西区出身のこうの史代さん（47）＝京都府。原爆資料館（広島市中区）で倒れるなど「残酷でつらい」と原爆を避けてきましたが「今向き合わなければ」と制作を決めました。作品はネットや口コミで広がってヒットし、映画にもなりました。

放射線の後障害や差別がテーマです。作品を通じて「原爆や戦争をより身近に、主人公を友達のように感じてほしい」と言います。

戦時中の広島と呉を舞台にした「この世界の片隅に」も出しましたが、今は、原爆漫画を描くつもりはないそうです。「私の作品は創作。いろいろ調べて作っていった。誰でもできる作業。読みたい人が多いが、描きたい人が少ないのが現状。いろんな人が描くべきだ」と説明します。

「戦争を経験していなくても、それぞれの時代や場所で平和について考え、伝えていかなければいけない」。私たち10代には、他人のことを自分に置き換えて考える想像力を持ってほしいそうです。

（高1岡田実優、中3平田佳子、中2佐藤茜）

「夕凪の街　桜の国」（2004年）
「夕凪の街」「桜の国」の２部構成。「夕凪の街」は、原爆投下から10年後の広島が舞台。主人公の皆実が被爆体験を引きずる苦悩を描く。「桜の国」は、現代の東京で、皆実の弟旭や、被爆２世で皆実のめい七波、おい凪生の恋愛を通して、被爆の影響を描く。©こうの史代／双葉社

## 暮らし奪われる怒り込め
### 松尾しよりさん（51）

「誰が何の権限で、人々の当たり前の生活を壊すのか。怒りがあった」（撮影・中２佐藤茜）

松尾しよりさん（51）＝東京都＝は、当たり前に過ごしていた家族の生活が、原爆で突然奪われる姿を描きました。「一生懸命守っていた暮らしが、国同士の争いで崩されるなんて、人として許せるものではない」と作品に込めた思いを話します。

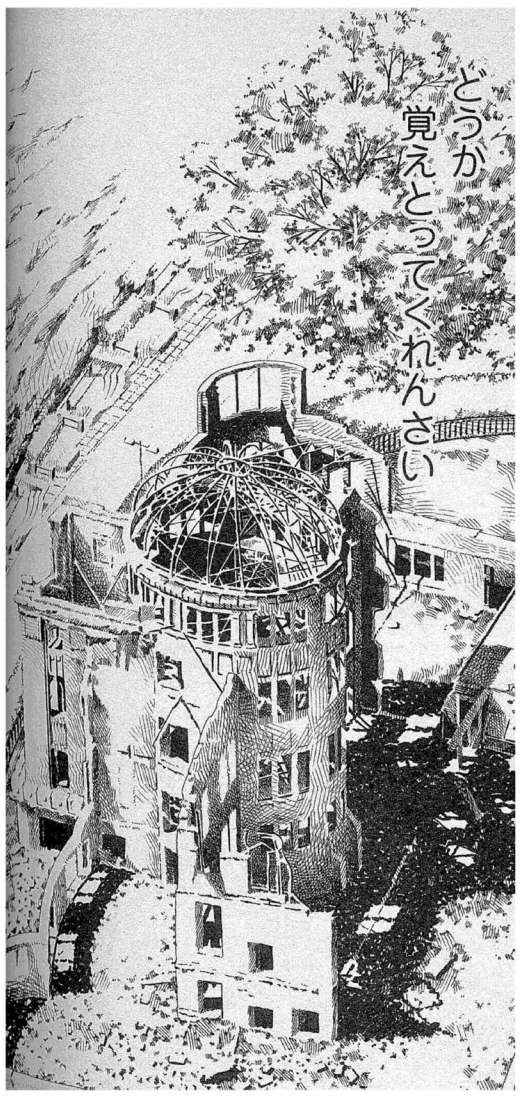
名古屋生まれの大阪育ち。子どものころから戦争や原爆のテレビ番組、写真集を見てきました。漫画家になる前から描きたいと考えていました。デビュー8年後の1998年にやっと戦争漫画「空と海のあいだ」の連載を始めました。「君がくれた太陽」も編集者に希望を伝えて実現しました。戦争を知らない現代の人が作品に入り込みやすいよう、家族の視点を大切にしています。

「君がくれた太陽㊤㊦」（2008年）　1929年に開店した百貨店の福屋（現福屋八丁堀本店、広島市中区）で出会った芙美子と寛二。いつしか２人は恋に落ち、寛二が営む青果店のある革屋町（現中区本通）で所帯を持つ。戦争が暗い影を落とす中、笑顔で前向きに生き続けようとする一家を原爆が襲う。

連載を始めるまでの1年間、当時の絵はがきや本を買ったり、被爆者の話を聞いたりしました。話してくれた被爆者の思いを伝える、というプレッシャーがしんどいこともありました。今までで一番苦労した作品だそうです。

今後は原爆による差別や健康不安を抱えながら戦後の広島を生き抜いた人たちを題材にした漫画を描きたいと思っています。「広島の復興が福島にも勇気を与えるはず」と実現を願います。

（高3岩田壮）



「君がくれた太陽」の一場面

## 葛藤の末 証言描く決意
### 西岡由香さん（51）

「被爆体験だけでなく、８月９日を含む被爆者の人生を描きたい」（撮影・高１岡田実優）

「被爆者の心には今でも炎が燃えている。証言を聞くと自分も心が被爆する。それを伝えたい」。西岡由香さん（51）＝長崎市＝は言います。

西岡さんは、1999年に乗った世界一周の旅「ピース・ボート」でナガサキが世界中で知られていると知り、好きな漫画で長崎原爆を表現できないかと考えました。「被爆していないのにいいんだろうか」と悩みましたが、被爆者の「僕らの経験した1万分の1でもいいから伝えて」の言葉で決心しました。

最初は、当時を正確に描けない、と中高生の女の子が被爆者に出会って話を聞く作品にしていました。その後、被爆者や編集者に依頼され、被爆証言を漫画にするようになりました。

西岡さんは「被爆マリアの祈り」を読んだ男性被爆者に言われた「被爆者はもっと深い目をしている」の一言が忘れられません。「まだまだ私は分かっていない。一生かけてページを重ねていきたい」

被爆体験だけでなく、被爆も含む人生を描くことで悲惨さをより伝えられると考える西岡さん。当時の詳しい話が聞ける、被爆者が生きているうちに多くの作品を出したいと思っています。

（高2風呂橋公平）

「夏の残像―ナガサキの八月九日」（2008年）　被爆者である祖母の住む長崎を訪ねた東京在住の高校生カナ。米国や韓国にも行き、原爆の「負の遺産」を知る。

「八月九日のサンタクロース―長崎原爆と被爆者」（2010年）　長崎の歴史や被爆について説明する「長崎原爆と被爆者」、東京から長崎に引っ越した中学生まゆが原爆について知る「八月九日のサンタクロース」、エピローグの「明日への約束」の３部で構成されている。

「被爆マリアの祈り―漫画で読む三人の被爆証言」（2015年）　長崎で被爆した３人それぞれの半生を描く。

## 切り口斬新 女性作家活躍
### 京都精華大の吉村和真教授

京都精華大マンガ学部教授の吉村和真さん（44）は「2000年代になって原爆漫画が目立つようになった」と言います。1960年代の後半以降に生まれ、小学校の図書館に置かれていた漫画「はだしのゲン」を読んで育った世代が、原爆や戦争の記憶を風化させないために描き始めたからです。

新しい切り口を開いたのはこうの史代さん。こうのさんはじめ女性の漫画家が、女性を主人公に、生活者としての視点で表現しています。「どうしたら読者に広く受け入れてもらえるかを、戦争を体験してない作者が独自の目線で考えたから」と吉村さんは分析します。これまでは作者が男性で、主人公の男性が敗戦に向かって特攻など別れの人間ドラマを描く作品が特徴だそうです。

現在も毎年のように女性による戦争、原爆漫画が出版されていて、新たな視点で当時が描かれています。

（高２芳本菜子）

次回は７月21日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=60586）で読むことができます。